

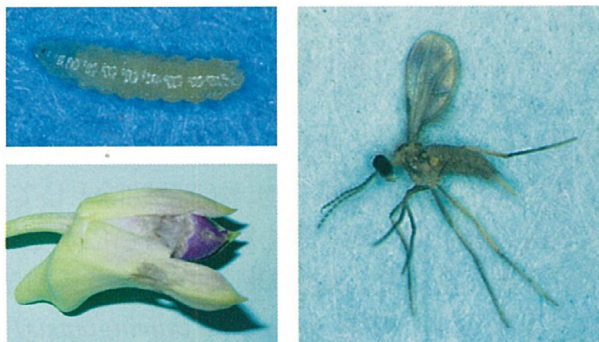
各地で話題の病虫害

ランツボミタマバエ

学名: *Contarinia maculipennis* Felt
英名: Dendrobium blossom midge

2005年9月、福岡県のデンファレ栽培施設において蕾を加害するタマバエの幼虫が発生し、九州大学、沖縄県農業試験場で同定したところ、本種であることが確認された。また、2006年1月には、宮崎県の洋ラン栽培施設において本種幼虫の被害が確認された。本種は、1989年以降、沖縄本島での被害が確認されている。

本種は、ハワイ、東南アジア等に分布し、ハワイでは、ラン（デンファレ）以外にもハイビスカス、ニガウリ、トマト、ナス、ジャガイモ、ピーマン、ジャスミンなどの花蕾を加害することが報告されている。



本種に加害された蕾はゴール化し、落蕾や奇形花となり、または開花しても食害部分は水浸状の染みとなるため商品価値がなくなる。

成虫は、体長約1.5mmで蚊に似ており、半ば開いた花蕾の先にまとめて産卵する。孵化幼虫は蕾の中に潜り込み、花卉の内側を食害する。ゴール化したランの蕾では、多い場合は十数頭寄生することもある。終齢幼虫は体長約2mmで、跳躍して蕾を脱出し、土中や鉢土の中で蛹化後、2～3週間で羽化する。

防除方法としては、本種は広食性なので施設外への脱出に注意するとともに、植物体上の被害蕾や地上に落下した蕾を速やかに除去して幼虫の拡散を防ぐこと。また、棚下の地表部等にマルチを張り、蛹化を防ぐ方法も有効である。

トマトすすかび病

病原菌: *Pseudocercospora fuligena* (Roldan) Deighton
英名: Black leaf mold of tomato

2004～2005年に三重県、徳島県、京都府、愛知県及び岐阜県で、トマトの葉に黄斑を生じる等の症状が発見された。いずれも顕微鏡下で確認したところ、細長い分生子が確認され、*Pseudocercospora fuligena* (Roldan) Deighton によるトマトすすかび病と診断された。本病は国内では1996年に宮崎県で初めて報告があった。

本病は初めに葉裏に不明瞭な淡黄緑色の病斑が現れ、やがて灰褐色粉状のかびを生じる。病斑は次第に拡大し、円形あるいは葉脈に囲まれた不正形病斑となり、灰褐色～黒褐色に変わる。*Fulvia fulva* (Cooke) Ciferri によるトマト葉かび病に病徴が酷似しているが、すすかび病は葉裏



に生じる病斑がやや黒味を帯びている。葉の表面には裏面より

やや遅れて不明瞭な淡黄褐色の病斑が現れ、かびを生じるが裏面に比べて少ない。被害葉は早期に垂れ下がり、乾燥巻縮する。

本菌は不完全菌類に属する。分生子は淡褐色、鞭状または円筒状で、先端は少くびれ、小型の油胞がある。大きさは13.3～170.3×2.7～5.6μmで、単胞もしくは1～15個の隔壁を有する。生育適温は26～28℃、形成適温は18～22℃、発芽適温は26℃付近である。

本病原菌は被害葉及び種子で越冬し、翌年の伝染源となる。本病は多湿条件で発病しやすく、密植、過繁茂、施設における換気不足などが原因となって発病する。したがって、過湿にならないよう管理する他、発病葉や被害残さは施設外に持ち出し、処分する等の防除対策が必要である。

写真提供: 愛知県農業総合試験場 藤田智美氏